

火山調査研究推進本部政策委員会総合基本施策・調査観測計画部会
第 7 回調査観測計画検討分科会における
「火山に関する総合的な調査観測計画「目次」・「はじめに」・「第 1 章」・
「おわりに」の要点（素案）」に関する主な意見

火山調査研究推進本部政策委員会総合基本施策・調査観測計画部会第 7 回調査観測計画検討分科会における委員からの主な意見において、「火山に関する総合的な調査観測計画「目次」・「はじめに」・「第 1 章」・「おわりに」の要点（素案）」に関連するものは以下のとおりである。要点の各項目（網かけ部分）に対する第 7 回分科会での意見を整理しリスト化した。

目次

- ・ 目次と第 1 章の各項目の順番・文言が異なる部分がある。
（上記意見への考え方）
→修正する。

はじめに

- ・ 総合基本施策中間取りまとめの「当面10年間に推進する火山に関する総合的な調査観測に関する事項」に基づき、第一線で活躍する研究者・行政官を中心に、高密度で具体的な計画案を立案

- ・ 「第一線で活躍する研究者・行政官」という文言は総合基本施策では使われておらず、不要。
（上記意見への考え方）
→総合基本施策との平仄を考慮しながら修正する。

第 1 章

- ・ 火山ハザード対応の即時性と、常時観測の長期性を両立する調査観測の戦略

- ・ 常時観測は即時性を含んでいるのではないか。
（上記意見への考え方）
→火口からの距離と観測点の維持のバランスを考慮する必要があるということ。即時性を追求するならば火口近傍の観測点が重要になるが、一方で、火口近傍の観測点は一度の噴火で使用不能になる可能性もあり、長期的に観測し続けるという観点からは、火口から少し離れた観測点が重要になる。

- ・ 火山専門人材は少ないながらも世界有数の活火山数・密度をカバー

- ・ この文章の意図が分からない。
（上記意見への考え方）

→少人数でありながらも、世界有数の数・密度である活火山を対象に、観測の実績を積んできたことを示す意図。

・調査観測対象の特性

- ・空振や海中音波の位置づけや意義も書いてはどうか。
(上記意見への考え方)
→総合基本施策の記載内容も確認しながら修正する。

・大学、研究機関等の研究方針に沿った個別最適による観測点の整備

- ・火山噴火予知計画の中で大学が観測網を整備してきた流れを示してはどうか。
(上記への意見)
→今までの観測点の経緯は「はじめに」にあったので重複になるのではないか。
→火山噴火予知計画が重要な役割を果たしていたことを記述してはどうか。
→総合基本施策第1章で、火山噴火予知計画については記述されているので、調査観測計画においてそれを改めて詳細に記述するものではない。
(上記意見への考え方)
→調査観測計画では、火山噴火予知計画における観測網整備と火山研究の経緯や、総合的な調査観測計画との違いを説明するために、簡潔な記述はしたい。

おわりに

・将来的に、全国111活火山の知見を統合し、火山に関する総合的な評価を推進

- ・活火山の数は今後変更があるのではないか。
(上記意見への考え方)
→現段階では111火山を示し、調査観測計画の更新の際に、この部分も更新していくのが良いと考える。

・火山に関する調査及び研究を通じて、活動火山対策に貢献するため、本調査観測計画に基づき、我が国の火山に関する総合的な調査観測を推進し、関係者一丸となって努力していかなければならない

- ・この項目のみ体言止めでないため、違和感がある。
(上記意見への考え方)
→文意を伝えるためにこの表現となっている。